

唯美主義と世紀末ジャーナリズム文化

—*The Woman's World* 編集経験がワイルドに与えた《付加価値》を問う—

梅 津 義 宣

I

「唯美主義者ワイルド像」と「世紀末・大衆ジャーナリズム文化の世界に身を投げるワイルド像」——。この二項対立するオスカー・ワイルド像をめぐって双方の本質的な関連性を掘り下げる試みはきわめて重要な課題であるといつても過言ではない。この問題は総合的・複合的・横断的な観点から捉えられるべきもので、奥行きのある接近と考察の可能性を秘めているからである。

女性向け月刊誌 *The Woman's World* の編集主幹としての経験がワイルドの文学作品に与えた《付加価値》について考察するのが本稿の目的である。とりわけ、彼の風習喜劇に投影された「ジェンダー・イデオロギーの解体」や「フェミニズム」の問題を主軸にしながら彼の趣向、テーマの様式性、技法などについて敢えてポジティブな立場から検討したい。ただ、こうしたポジティブな立場に基づいた考察は、即、ワイルドの世紀末ジャーナリズム礼賛や通俗的大衆文化の全面的な受容などと安易に直結させようとするものではない。本考察は、ワイルドが相克と葛藤に充ちたディレンマの中で、彼本来の芸術的主張である「高踏な唯美主義」と「低俗な世紀末ジャーナリズム」の両極にある芸術的領域とを、実際の作家活動の中で、いかなる弁証法的論理に基づいて融合させようとしたかを実証的に確認する一つの試みである。

II

カッセル社から女性月刊誌 *The Lady's World* の立て直しを依頼されたワイルドは、何よりもまず本誌のジェンダー・イデオロギーを話題にしている。1887年4月、彼は同社の経営責任者ウィームズ・リード宛の書簡で次のように述べている。

It seems to me that at present it is too feminine, and not sufficiently womanly. ... *The Lady's World* should be made the recognized organ for the expression of women's opinions on all subjects of literature, art, and modern life, and yet it should be a magazine that men could read with pleasure, and consider it a privilege to contribute to.⁽¹⁾

ワイルドは、この書簡において、果敢にも、これまで同誌が守りとおしてきた“being feminine”という旧来の女性の在り方から新しい“being womanly”の理想像への改変を力説しながら、同時代のジェンダー規範に基づく「女性らしさ」の崩壊を主張したのである。ここでは「何を身につけ、どのように着飾るかなどに主眼を置いて生きるような女性」でもなく、「家父長制のもとに弱々しく男性に隸属するような女々しい女性」でもなく、「男性と同等の権利を主張し、それを保持できる新しい女性の在り方」が述べられている。しかも、「女性が文学・芸術・現代生活に関して率直な意見を述べることのできる認知機関（“the recognized organ”）」としての本誌が本来担うべき「ジェンダー・ポリシーの具現化」を明確に打ち出している。

1886年11月刊行の *The Lady's World* の主な眼目はファッションの分野であった。当時すでに高級服飾関連の雑誌 *The Queen*, *The Lady's Pictorial* をはじめ多種のファッション系の女性向け雑誌が発布されている。(リード宛の書簡に見る) 誌名変更に纏わるワイルドの執拗な要請の狙いの一つには、周辺の月並みな雑誌群からの「商品としての種別化」にあったとも考えられる。消費の対象になり得る「商品」としての本誌という位置づけが狙いである。

結局ワイルドの要請が適い、*The Lady's World* は1888年10月、*The Woman's World*へと誌名を変更される。ワイルドは *The Woman's World* の編集主幹として世紀末ジャーナリズム文化の領域に身を置くことになる。本誌は19世紀末に登場する新しい知的な女性の読者に向けた雑誌であり、当然、内容的には女性に関する問題が中心になっている。当時、編集副主幹のアーサー・フィッシュが証言するように、当時ワイルドは「女性の社会的地位の向上」や「女性の政治参加」のことで強固に主張を重ねるあまり経営陣とよく意見の衝突を引き起こしている。⁽²⁾ また、ジョージ・ウッドコックが指摘するように、ワイルドの主張の力点は「女性と男性が平等に教育を受ける権利」とともに「平等に教育を授ける権利」にあった。⁽³⁾ 確かに、目次を見ると「女性の高等教育」についての記事が相当数あり、さらには、「女性の職業」、「海外に住む女性の話題」などが続き、このほ

かに、女性のファッション、服飾に関する歴史、演劇に関わるものがある。(ここには男性読者向けの雑誌にあるような、哲学、科学、政治、経済、宗教などを扱う記事はほとんど見られない。) 事実、*The Woman's World* の執筆者は 90 % 以上が女性で、同時代の著名な「貴婦人達」はもちろん、女性問題の代表的活動家 M.G. フォーセットなども名前を連ねている。さらには、ワイルドの母レイディー・ワイルド、妻のコンスタンスも含まれている。ワイルド自身も編集主幹として健筆を揮っており、エッセイ “Literary and Other Notes” (創刊号から第 5 号まで) さらに “Some Literary Notes” (第 15 号から第 20 号まで) を執筆・発表している。

III

ワイルドの風習喜劇 *A Woman of No Importance* (1893 年 4 月 19 日初演) に登場する 18 歳の美しいアメリカ人女性ヘスター・ワースレイの存在に注目したい。彼女は典型的なピューリタンである。本風習喜劇の主人公はダンディーな個人主義者イーリングワース卿で、常に世紀末的退廃の匂を漂わせている。彼は、若い頃に、ある女性と恋に陥り、勝手気ままに玩んだ挙げ句、無惨にも彼女を捨ててしまう。彼女の名は、今、アーバスノット夫人と言い、まさに犠牲者、過去を背負った人間として、二人の間に生れた息子ジェラルドを女手一つでひっそりと育てている。ヘスターはアメリカの富豪の遺児で「女性の天国」アメリカからイギリスの社交界に招かれて来ているという設定である。彼女はジェラルドの恋人である。イギリス・ヴィクトリア時代末期に生きるアーバスノット夫人と典型的なアメリカ人ヘスターの共通の特徴は、本作品に頻出する *pure, purity, good, simple* というような言葉が表すピューリタンのもつべき象徴的な品性である。いみじくも「純潔」を中心とした生き方を最善とする二人のピューリタンは、イーリングワース卿のダンディズムとは対極に位置する。

しかし、アーバスノット夫人のように（イギリス世紀末特有の）因習的な道徳的概念に拘束されて生きるピューリタンとしての生き方は、ヘスターという大胆で勇気ある「新大陸型ピューリタン」にとっては格好の批判・攻撃の標的となる。しかし、ここには確かに「新しい女性」としての理想的な姿がある。

以下に引用する「一方的に他者を切りつけるかのような」ヘスターの台詞は、いずれも社交界での発言で、ハンストン卿夫人との間で交わされたものである。

HESTER (standing by table) : … You rich people in England, you don't know

how you are living. How could you know? … With all your pomp and wealth and art you don't know how to live—you don't even know that. … Oh, your English society seems to me shallow, selfish, foolish. … It sits like a dead thing smeared with gold. It is all wrong, all wrong. (Act 2. p. 434)

LADY HUNSTANTON : My dear young lady!

HESTER : It is right that they should be punished, but don't let them be the only ones to suffer. If a man and woman have sinned, let them both go forth into the desert to love or loathe each other there. … Don't have one law for men and another for women. … You are unjust to women in England. (Act 2. p. 435)

このような勇猛なヘスターの姿は、ワイルドの短篇 *The Canterville Ghost* (1887 年 2 月 & 5 月、“The Court and Society Review” に連載) に登場するイギリス駐在アメリカ公使オーティスの娘でピューリタンのバージニアにも見受けられる。彼らの闘いの標的は、一様に、上辺だけを取り繕うような上品さや実利実益をモットーとする功利主義・俗物思想を基盤とした（ヴィクトリア時代特有の）因習的道徳観である。イギリス世紀末を背景にしてアメリカ人女性という「異質の少数派」がピューリタニズムという先鋒的武器をもってイギリス人の道徳観と闘うという設定である。彼らの闘いのスローガンは、単にキリスト教的教養・品性の宣伝というよりはむしろ、「フェミニズム」であり「ジェンダー・イデオロギーの解体」であるともいえるだろう。

確かに、これらの「アメリカ型ピューリタン」たちはイギリス・ヴィクトリア時代の道徳観・価値観の弱点を強烈に批判しながら声高に「理想的フェミニズム」を唱導している。しかし、果敢に独自のピューリタニズムを主張すればするほど、彼女たちを囲むイギリス社交界メンバー（特に「高貴な」淑女たち）との間に違和感が生れ、障壁ができるてくる。彼女たちは、所詮、「異質の存在」で、作品の主役ではない。ここでは、ピューリタニズムはあくまでも「フェミニズム」や「ジェンダー・イデオロギーの解体」の補助的宣伝手段として利用されるにすぎない。

やがて、これらの主張を凌駕する「世紀末のダンディズム」の世界がワイルドの手によって設定される。ワイルドの風習喜劇（4 篇）には、それぞれ、「過去の罪」を背負い、世紀末的頽廃を漂わせながら、因習的な道徳観を否定し、「精神の貴族性」を求めて生きるダンディーたちが登場する。

IV

ワイルドは、*The Woman's World* の編集には、創刊号から第 24 号（1887 年 11 月～1889 年 10 月）までの 2 年間にわたって携わった。各号の表紙には決まって編集主幹 “Oscar Wilde” の名前が刻印された。しかし、ワイルドは編集主幹時代の最終期になると同誌編集への情熱を失ってしまい、その結果、編集主幹の座を降りてしまう。（この辞職の詳細な理由については、今後の調査・接近を待たなければならない。）

一つ言えることは、当時のイギリスの世論は、唯美主義に立った文芸活動を束縛しながら、同時に、ジャーナリズムにもそのような制約と誘導を行ったという事実である。その結果、ジャーナリズムは唯美主義文学やそれに類するものの成果を「商品」という不快かつ醜悪な形に変貌させるという経路を辿ったのである。

しかし、ジャーナリズム世界でのワイルドの経験は確かに《付加価値》として文学作品に投影されていることを明記しなければならない。まずは、本稿に示した「ジェンダー・イデオロギーの解体」に関わる説得力に充ちた主張は多くのジャシルに波及している。それに、O. D. エドワーズ他が克明に示すように、ワイルドの諸作品に散見する社会風刺、アフォリズム（エピグラム）、機知、皮肉などの《源泉》としての「ジャーナリズム経験」という位置づけが肝要であると考えられる。⁽⁴⁾ さらには、*The Picture of Dorian Gray* や *Lord Arthur Savile's Crime* などに見られる「地理的・歴史的現実に忠実に沿った文学的技法」も注目に値する作品の特性である。ここでは、ジャーナリストとして培った経験が活かされていると理解できる。W. V. Eckardt 他による *Oscar Wilde's London* はワイルドのこのような技法による文学的特性と芸術観とを実証的に分析している。

「唯美主義」と「世纪末ジャーナリズム文化」—— (*The Woman's World* の編集主幹を辞めた) 80 年代後期から 90 年代にかけてのワイルドの文学作品を、この対極に位置する曖昧な二つの芸術的領域の《はざま》と《ディレンマ》の中から生れた「止揚」としての産物と理解することができるだろう。

- * 本稿は日本ワイルド協会第 32 回大会（2007 年 12 月 15 日・慶應義塾大学にて開催）のシンポジウム「ワイルドとジャーナリズム」における口頭発表原稿に大幅な加筆修正を施したものである。
- * 【使用テキスト】：Maine, G. F. ed. *The Works of Oscar Wilde*. London and Glasgow : Collins Clear Type Press, 1961.

【参考文献】

- Bird, Alan. *The Plays of Oscar Wilde*. London : Vision Press Ltd., 1977.
 Brake, Laurel. *Subjugated Knowledges ; Journalism, Gender & Literature in the Nineteenth Century*. New York : New York University Press, 1994.
 Braybrooke, Patrick. *Oscar Wilde*. London : The Folcroft Press, 1970.
 Broad, Lewis. *The Friendship and Follies of Oscar Wilde*. London Hutchinson, 1954.
 Cohen, Philip K. *The Moral Vision of Oscar Wilde*, London : Associated University Presses, 1978.
 Eckardt, Wolf Von / Gilman, Sander L. / Chamberlin, J. Edward. *Oscar Wilde's London*. London : Michael O'Mara Books Ltd., 1988.
 Edwards, Owen Dudley ed. *The Fireworks of Oscar Wilde*. London : Barrie & Jenkins, 1989.
 Ellmann, Richard. *Oscar Wilde*. London : Hamish Hamilton, 1987.
 Erickson, Donald H. *Oscar Wilde*. Boston : Twayne Publishers, 1977.
 Gagnier, Regenia. *Idylls of the Marketplace : Oscar Wilde and the Victorian Public*. Stanford : Stanford University Press, 1986.
 Hart-Davis, Rupert ed. *The Letters of Oscar Wilde*. London : Rupert-Hart Davis Ltd., 1962.
 Hyde H. Montgomery. *Oscar Wilde*. New York : Da Capo Press, Inc., 1975.
 Kohl, Norbert. *Oscar Wilde : The Works of a Conformist Rebel*. Cambridge : Cambridge University Press, 1980.
 McKenna, Neil. *The Secret Life of Oscar Wilde*. New York : A Member of Perseus Group, 2005.
 Mikhail, E. H. ed. *Oscar Wilde : Interviews & Recollections (vol.I&II)*. London : Macmillan, 1979.
 Pearson, Hesketh. *The Life of Oscar Wilde*. London : Methune, 1946.
 Raby, Peter. *Oscar Wilde*. New Rochelle : Cambridge University Press, 1988.
 Woodcock, George. *Oscar Wilde ; The Double Image*. New York : Black Rose Books, 1989.

【注】

- (1) Hart-Davis, Rupert ed. *The Letters of Oscar Wilde*. London : Rupert-Davis Ltd., 1962, pp. 194-195.
- (2) Mikhail, E. H. ed. "Memories of Oscar Wilde", *Oscar Wilde; Interviews and Recollections (Vol. I)*. London: Macmillan, 1979, pp. 152-154.
- (3) Woodcock, George. *Oscar Wilde ; The Double Image*. New York : Black Rose Books, 1989, p.150.
- (4) Edwards, Owen Dudley ed. *The Fireworks of Oscar Wilde*. London: Barrie & Jenkins, 1889. この文献全般にわたって、年代別に、社会風刺、アフォリズム（エピグラム）、機知、皮肉などの実例が精緻に記載されている。